

優秀賞 [高校生の部]

“わくわく社会”を「未来を想像できる社会」と定義づけ、「ゆとり教育」を「新ゆとり教育」として本来あるべき姿で再構築しようという主張が高く評価されました。

NFJ学生小論文コンテスト2013
世界に向けて未来を提案しよう!
あなたが考える“わくわく社会”を
描いてください
入賞作品



未来を想像できる社会へ ——新ゆとり教育から生まれるわくわく社会

大阪府立千里高等学校3年

後藤 悠香 ごとう はるか

推理小説のページをめくるとき。遠くへ引越した親友と久々に会うとき。9回裏2アウト満塁逆転のチャンス。わくわくするとき、私たちはいつも未来を想像している。何が起こるかわからない次の瞬間に期待し、胸が高鳴り、生きる力を得るのだ。

だが、そのわくわくの源である想像は現代を生きる私たちにとって難しいものとなってきた。学生は学校や学習塾に追われ、会社員はノルマを達成するために走り回り、親は少ない収入を切り盛りするため頭を抱える。どの世代にも「しなくてはならない」ことが増え、未来を想像する時間が減ってしまった。

いつから私たちは未来を想像し難くなったのだろうか。私は本棚にある1冊の薄い冊子を手に取った。小学校の卒業文集だ。自由作文が載せられていて、その多くの題名は「将来の夢」。めくるとそこにはキラキラした未来が溢れていた。女優、宇宙飛行士、天才科学者。限界や挫折を知ってしまった私たちに言わせれば、そんな夢は選ばれた一握りの特別な人間にしか叶えられないと、そう一蹴できるものばかりで。当時の私たちはきっと無知であった。女優になるためのプロセスや宇宙飛行士になるための条件、天才の定義。何一つ知らないままに、ただ未来を想像していた。無知であったからこそ、想像して、

未来を想像できる社会へ

——新ゆとり教育から生まれるわくわく社会

希望を抱き、わくわくした日々を送ることができていた。

今日の私たちは多くを知りすぎてしまった。インターネットが使えるのはもはや当たり前の社会となり、1人1台のスマートフォン。テレビをつけるだけで何十万もの情報が入ってくる。真か偽かの区別もつかないまま全ての情報を受け入れ、臆尻を含んだ取捨選択をし、自分の意見を構築し過信する。いつの間にか想像することをやめ、情報を比較し、未来を予想するようになった。そうして柔軟な想像力が死して合理的に先を予想する能力が培われたことで、私たちの未来想像による「わくわく」も同じく死んでしまった。

では、どうしたらその想像力を取り戻し、わくわくが溢れる社会を形成できるだろう。まず私はわくわく社会を「未来を想像できる社会」と定義付けたい。皆が未来を想像し、希望や期待を抱くことのできる場所こそが目指すべきわくわく社会であると考えているためだ。一昔前の世界は想像に満ちていたに違いない。なぜなら今存在する素晴らしい科学や医療技術、国際関係は、全て想像することから始まったから。「こんなものがあればいいな」「こうなればいいのにな」。そんな漠然とした理想という名の想像がわくわくを生み、それが挑戦につながり、私たちは進歩する。暗いニュースに覆われている今こそ、私たちはこのような社会を目指していくべきでは

ないだろうか。

さて、私は昨今社会が陥っているわくわく停滞の原因は「脱ゆとり」を目指す社会にあると考える。

ゆとり、という言葉に多くの日本人はネガティブなイメージを持っている。その原因は1980年度より施行されたゆとり教育にあるだろう。この教育に関して批判的な意見が多い中、私はそれこそが今の日本に必要なだと信じている。目的としていた自主性の向上が重要なのは勿論、余暇が増え心と時間にゆとりができると、ふと思いついた疑問や興味を探究できるし、自分は何が好きなのか、何がしたいのかを想像できる。家族間、友達間の交流の時間も大に取ることができると、非行や心の病を抱える子どもも減るだろう。加えて、机に向かう学習以外の経験をすることで自分の将来を広い視野で想像できるようになり、未来へわくわくを感じるに違いない。しかし、ゆとり教育は2011年度の学習指導要領の改訂によって廃止された。理由として、国際学力調査での学力低下が挙げられているが、私はこれをゆとり教育によるものではないと考える。日本のゆとり教育政策として、土曜授業撤廃に総合教育の増加、詰め込み教育をよしとしない方針の授業が行われたが、それらは国際学力調査総合1位であるフィンランドの教育方法とよく似ていたからだ。だがこれを考慮されることなく、ただ数値の減少

だけを見てゆとり教育は撤廃されてしまった。

ゆとりが悪と称される今だが、「未来を想像できる社会」形成のために、教育によってゆとりある若者を育てることは必要不可欠である。なぜならゆとりは想像を生み、いつの時代も若い世代から新しい社会が生まれるからだ。

そこで私は「新ゆとり教育」を提案したい。この教育の目的は「知識」ではなく「学びへの意欲」を教師がサポートすることにある。これまでの教育は教師が生徒に教え、生徒が学ぶというものであった。しかしこの新ゆとり教育では、それが絶対的な教育の形ではない。例えば生徒が自分のお気に入りの場所を教師にプレゼンする。教師はそれをパワーポイントの使い方など必要最低限だけサポートして、あとは生徒に任せるのだ。授業1コマを各生徒に与え、好きなように授業を作ってもらっても面白い。こうすることで当初のゆとり教育が目指した自主性が育まれるし、生徒は自分の「好き」を自覚し、将来をより豊かに想像できるだろう。

そして、この教育に大切なもうひとつの点は、自分と社会のつながりを可視化させることだ。日本がゆとり教育に失敗した原因はそのつながりの不可視にあると考える。というのも、私は今年の夏、ゆとり教育の成功国であるフィンランドに1ヶ月留学する機会を得て、そこであることに気が付いた。学びが社会に

直接つながっているのだ。例えば街のど真ん中にある抽象アート。2メートル超のそれは有名な芸術家によるものでなく、普通の学生の作品なのだと聞いた。他に、多くの言語で書かれた標識やメニュー。自分の挑戦や学びが見えて、反映される。これこそが学習への意欲につながっているのだ。また、学歴によって選べる職の幅が変わらないという社会と関連しない部分が見えることで、学問だけに縛られることなく自由な想像や活動ができるのだろう。このつながりの可視化がゆとり教育を成功させるか否かを決定したに相違ない。

この新ゆとり教育について、学力低下が不安視されることは明白であるが、フィンランドが行っているように、教師を増やして少人数指導にしたり、授業についていけなくなった子どもに補助教員をつけることで学力の低下を防ぐことは可能だろう。また、この教師・補助教員枠は就職難に悩む就生の大きな助けともなるし、この教育を受けることで想像力が養われ、現存する問題の思いもよらない解決策が打ち出されるかもしれない。

私が「新ゆとり教育」を実現させるためにできること、それは私自身がこの教育の意義や利を伝える他にない。そのために私はまず高校を卒業してアメリカの大学へ入学する。そこで教育を学びながら、さまざまな背景を持つ人と意見を交わしたい。大学院はフィン

未来を想像できる社会へ ——新ゆとり教育から生まれるわくわく社会

ランドへ行き、実際に世界一の教育を見て、私の目指すべき社会への志をより強いものにする。そして自分の考えを、自信を持って多くの人に伝えたい。どんな形でそれが実現するかはまだわからないが、私は必ず成し遂げる。多くを知った今でもわくわくは感じる事ができるのだと。今まさに私がそう感じているように。

日本から始めよう。日本はもう世界にとって大きな存在となっている。未来を想像し、未来を創造するのだ。そうして日本がわくわく社会になったとき、世界も同じようにわくわくに満ちているに違いない。

参考文献

- ・ 文部科学省「学習指導要領」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youryou/main4_a2.htm
- ・ リッカ・パッカラ『フィンランドの教育力——なぜ、PISAで学力世界一になったのか』学研新書、2008年